

「近代」上海における女学生の誕生と旗袍^{チーパオ}

謝 黎

1. はじめに

本稿では、中国清朝末期から中華民国期にかけて、「近代」上海に現れた新たな女性集団である「女学生」と旗袍^{チーパオ}、すなわちチャイナドレスとの関係を考察する。服飾学や歴史人類学的な視点から、女学生たちがどのように、「民族性」の強い伝統的な旗袍を装飾性の強い「新型旗袍」へと変化させ、多くの一般女性に広がっていったか、その過程における女学生の役割を考察するのが本稿の目的である。

まずは、清末・民国初期に誕生した女学生の様子と本稿の意図を簡潔に述べる。

清末期から民国初期にかけて、女学生の社会的地位は知識人からファッションリーダーへと移り代わっていった。その過程において、「奇装異服」の一種と見なされていた「新型旗袍」も流行服として定着していったのである。

そのような歴史的状況を背景にして、本稿は上海の「近代化」過程を通して、女学生の社会的意味や一般女性に対する影響力を明らかにし、「民族性」の強い伝統的な旗袍が西洋化するプロセスにおける女学生の役割を描くものである。

本稿の構成は以下になる。まず、女学生の社会的意味を明らかにする。清末期から民国初期にかけて上海では租界が開設され、さまざまな女学校が創立された。本稿ははじめに女学校にいた女学生像を描き出す。その上で、西洋化された女学生のライフスタイルから、「民族性」の強い服飾が装飾性の強い「奇装異服」に変化し、さらに、流行服としての新型旗袍になって

いくメカニズムを明らかにする。最後に、流行服としての新型旗袍の形や定義、成立などについて論じながら、初期段階の新型旗袍のイメージと女学生のイメージとのかかわりを分析する。

研究方法としては、活字資料である『申報』を継続的に解読することを通して、清末期から民国期までの社会構造の解明や女性とファッションのかかわり方、さらに、伝統的な道德観や価値観の変化の仕方、そして、「奇装異服」の登場などに注目して分析し、服飾学や歴史人類学的手法を用いて議論を進めていく。

本稿で取り上げている『申報』(1872-1949)は、中華人民共和国成立以前に発行された新聞の中で、もっとも発行期間の長い新聞である。『上海通史』においては、「中国近現代の百科全書」とも評価されている。それは、中国の近・現代を考える上で量的にも質的にも豊富な歴史資料を含むものであり、政治史や経済史、文化史などのさまざまな分野で貴重な情報源となっている。本稿はこの『申報』を活字資料として採用することで、女学生や服飾の変容を継続的に分析するものである。

2. 女学校の創設と女学生の登場

19世紀後半の上海では、租界が開設され、「近代」都市としての性格が現れようとしていた。すなわち、清末・民国初期の上海は、「近代」上海の出発でもあった。そうした上海では、女性のあり方も大きく変わろうとしていた。

その変化を先導していたのが「女学生」とい

う集団である。ここではまず、その女学生の成立を見てみることにする。

女学生が現れる前の清末期以前の中国の伝統的な女性観では、女性には「無才便是徳」が求められていた。女は才能がなくても、知識がなくても、伝統的な道德を守ればよいということである。たとえば、1880年9月3日の『申報』「論教女」が、「女子は才能がないのが幸せである。また、女には女の道理がある。婦人[結婚した女性]には婦人の道德がある」といった主張をしたことからそうした女性観をみることができる。また、1905年5月18日の『申報』「論女子教育宗旨」では、女性教育の目的は良妻賢母の養成と非良妻賢母の排除にあることが指摘され、1906年4月29日の『申報』「論女学宜注重德育」では、女性教育の中でもっとも重要なのは倫理と義務からなる德育であることが主張されている。いずれにしても、従来の女性教育では、知識を与えるよりも、伝統的な倫理観を守ることが重視されていた。

このような女性観は清朝末期まで続いていたが、西洋文化が流入するにつれ、その様子が変わりはじめた。清末期から民国初期の上海では、アヘン戦争後、租界が開設されるとともに、西洋文化も流入するようになった。この中で、欧米人の宣教師も中国に入り、布教を主な目的としながら、さまざまな教会学校ミッション・スクールを創立する。

菊池敏夫によれば、上海の女学校は、1850年に開校したアメリカ聖公会の裨文女塾という教会学校からはじまり、清心女塾、聖マリア女中、中西女塾などの学校が1850年代以降、1920年代にかけて誕生した。初期の女学校は学費を徴収せず、食事や宿舎も無料で提供する慈善的性格の強いもので、学生も経済的に余

裕のない家庭の出身者が多かった。しかし、しだいに学費を徴収する経営に移行し、入学する学生も裕福な家庭の子どもに移っていたという(菊池 2002: 38)。

欧米人などによって創られた女学校は、「近代」上海の新たな女性像を生み出していった。それが「女学生」である。これら女学生は、後に上海の社会やそのほかの多くの女性に影響を及ぼす原動力となっていった。

教会学校からはじまった女学校は布教を目的として、欧米式の教育を実施していた。その教育内容はキリスト教の教義や英語、国語や算数、声楽や家政などであった。とくに、家政の内容は実用的であったため、女学生の人気を博した。たとえば、美容やインテリア、友達や恋人の選び方、社交界の基本知識や一般常識、刺繍や料理などがその内容である。

また、上海でも、清朝政府の古い体制を批判し、西洋を学ぼうという風潮が現れ、「科学」や「文明」、「民主」といった概念が提唱されるようになった。その結果として、女性を束縛するような古い道德観が批判され、自由や人権、民主などの概念がメディアを通して、国民に普及していった。そこで中国の実業家や維新派¹も裕福な家庭の子弟などを対象に、さまざまな女学校を開設していた。1900年代に入ると、女子商科大学や震旦女子文理学院などの女子高等教育機関も設置されるようになった(菊池 2002: 38)。

しかし、これらの学校に入ることができたのは、先述したように一部の裕福な家庭の子弟であった。女学校が増加するにつれて、女学校に在籍し、卒業する女学生は新しい女性の代表とみなされ、一般民衆の憧れの対象になっていく。

1 維新派とは進化論や自由平等の思想に基づいて、伝統的な倫理観を変えようとした人々を指す。戊戌政変の最中、義和団運動や八ヶ国連合軍の中国侵入によって、中国北部は混乱に陥ったため、多くの文人が上海に移り、翻訳業や新聞業、学校の創設などにかかわった。西洋化を唱える蔡元培、張元済、嚴復などもこの時期に上海に集まって、多くの学校を開設して、維新派の中心を形成していた。

そのような女学校の教育方針、もしくは女学校に通う女性やその家庭の関心は、民国初期の「文明」を提唱する時代に対応して西洋文明であった。彼女たちは西洋の教育を受け、西洋式の名前をつけ²、ホームパーティを開き、ダンスパーティで踊り、映画を観て、西洋式のレストランで食事をした。

当時の女学生が楽しんだ娯楽のひとつに映画がある。民国初期において、映画は「近代」の象徴であった。とくに無声映画は、場面を説明する文字を読むことができなければ、楽しむことができない性質の娯楽である。そこでは、識字能力の有無が問われることになる。また上海に滞在する西洋人向けの外国映画は、役者の科白の外国語字幕を理解することができなければ楽しむことはできなかった。そのような映画を楽しむことができたのは、西洋式の教育を受けた女学生の特権であった。女学生は映画を鑑賞し、映画女優のファッションを真似して、西洋化した中国人として生活していた。

しかし、こうした女学生のライフスタイルは、伝統的な女性観が強固な民国初期には批判の対象となる。1904年9月28日の『申報』「答客論女学生」では、「最近女学校を作ることがはやり出したが、女学生が未熟であるため、軽率な行動が多い。日曜日になると革靴にメガネといういでたちで、小グループで町中をぶらぶらしている。また、茶室や酒館でも男女で雑談している女学生の姿をみることができる。このように、女学校や女学生などの〈文明〉や〈純粹〉のイメージの裏では、軽薄でいやらしい風習がはやり、貞と淫の道德基準を転倒した状況は、国の強弱にもかわりがある」と主張されている。西洋化したファッションや行動が、伝統的

な女性観の逸脱として危惧され、批判されているのである。

1908年8月8日の『申報』「女学生」では、夜中まで営業しているガーデン式のレストランに、上品で清潔感のある服を着て、ウエイトレスとして女学生が働いていることが報じられている。彼女たちは軽薄な客と接し、演奏や歌を人前で披露する。その記事の筆者はこのことをみっともないと批判しながらも、女学生のおかげでこのレストランは有名になったと指摘している。このような女学生を「笑う人もいれば、可哀そうと思う人もいる。羨む人がいれば愛する人もいる、そして恨む人もいる」とし、「女学生が幸せであると同時に、恥である」と結論づけている。また1912年9月5日の『申報』「新内則」では、女学校が女学生に教育すべき内容は「婦徳、婦言、婦容、婦功」という伝統的な女性観であると書いている。当時の女子は軽薄で貞操を無視し、恥を知らないために、婦人の道德教育が必要であると考えられていたからである。厚化粧をして、妖しい服を身につけているのは、「婦容」の面であり、性に対する興味は「婦功」の面であることが指摘されている。

伝統的な女性と異なる女学生は、伝統社会からは、しばしば批判を引き寄せるが、後には「新都市女性」（男性の付属物としての伝統的な女性から離れ、西洋文化を受け入れた都会の女性）の原型となり、新しい時代のリーダーとして大きな影響力を発揮するようになる。

こうした女学生の数の増加とともに、彼女たちはしだいにひとつの社会階層として注目され、重要な役割を発揮するようになった。とくに新文化運動や五四運動を契機として、女学生には古い社会を変革する新しい原動力として、大き

2 教会学校に入った女学生がTTやFF、AAといったアルファベットを重ねた外国人名をつけることが、摩登モダンの象徴とされていた。たとえば、中西女中という女学校に所属し、のちに女優になった殷明珠はFF女士（FOREIGN FASHION）と呼ばれ、殷が注文した革靴やファッションは「FF式」として、店のショーウィンドで飾られていたという（素素 1996：43）。

な期待が寄せられることになる（菊池 2002：38-39）。すなわち、「女学生」という言葉は民国期の上海では単に学校に通う女性という意味ではなく、新しい時代の新しい知識や技術を身につけ、教師や医者、看護婦や事務員といった職業女性として活躍する、知的エリートとしての期待が込められた言葉になっていくのである。

1933年9月26日の『申報』「論『女学生』」では、当時の上海では「女学生」という名称が氾濫していることが記されている。学校にいる女子学生を「女学生」と呼ぶべきであるのに、女学生の名称そのものが人気を得たために、新聞などのメディアが女学生を売り文句で使用している実情が指摘されるのである。例えば、記事の筆者の親戚は字が読めないのに、ただ女学生の格好を真似して、短い髪型や革靴、ストッキングといった摩登な要素を備えているだけで、「女学生」と呼ばれていたという。

1920年代後半から1930年代の「女学生」イメージは、健康な肉体を持ち、テニスやバレーボール、水泳などのスポーツを好んで、歌を歌い、ダンスを踊るなどというものである。そうした新たな女性の登場は、摩登を志向する中国の男性にとって魅力的であった。当時、上海に現れた新しい女性を上海小姐とも呼んでいた。1932年9月17日の『申報』「上海小姐」では、上海小姐とは単に上海に住んでいる若い娘を指すのではなく、一定の過程を経た女性が上海小姐であることが記されている。たとえば10歳のときに女学校に入り、知識より「美」とは何かを学ぶ。家政婦がいるので家事は一切しない。学校が終わってからの唯一の宿題は声楽とダンスの練習である。また、将来、西洋の食物に対応する胃腸を作るためにチョコレートやガム、炭酸飲料やアイスクリームといった西洋の食品を食べさせ、この訓練を小学校から大学まで続けさせる。やがて、映画の見方や洋食の食べ方、

自動車の乗り方などの課程を経て、自然に真正銘の上海小姐になるという。上海小姐は資本家である親の大金を使い、時代に適応した、健康的で社交界のスターとされている。また、このような上海小姐は誰でもなれるわけではなく、資本力がある親と優れた環境がないとなれないという。

上海小姐とも呼ばれる女学生は、「近代」上海の都市社会では、新たな女性像として注目を浴びるが、他方で批判も浴びた。保守的で伝統を重んずる知識人は、新たな女性としての女学生のスタイルを依然として批判した。1932年8月2日の『申報』「我所知道的一位摩登女子」では、厚化粧にハイヒール姿の摩登登女性が描かれている。この摩登女性はダイヤモンドの指輪や白金のネックレス、金の時計やブレスレット、真珠のピアスなどを身につけていた。衣食住のすべてが舶来品で、毎日やることは眉毛を書き、ファウンデーションや口紅を塗り、パーマをかけ、香水をつけ、マニキュアを塗ることである。または、恋人や男友だちと公園やダンスホール、映画館やゲームセンター、ドライブなどに行ったりする。さらに、トランプやマージャンで暇つぶしをする。摩登女性が学校で勉強することの目的はラブレターを書くことと、セックスの歴史に関する本を読むこと、そして化粧品の広告や映画の説明書を読むことである。口から出る英語は「I love you」, 「My darling」, 「Kiss」, 「Dancing Goal」……ばかりである。筆者はこのような摩登女性が上海に多数存在していると批判している。

そうした女学生の新奇なライフスタイルは摩登の象徴とされ、彼女たちの新しい服飾形態がしばしばメディアに取り上げられ、議論の対象になっていた。とくに話題になっていたのは女学生の「奇装異服」である。

3. 女学生の「奇装異服」

清末・民国初期の上海の女学生は、西洋的な摩登^{モダン}なライフスタイルの下で、さまざまな新しいファッションを生み出していた。

女学生が誕生する前の、中国での女性の服飾は主に2つの種類があった。ひとつは満洲王朝の旗人の服に由来する旗袍であり、もうひとつは漢族女性の「上衣下裳」³である。いいかえれば、流行服としての新型旗袍が現れる前に、女性は「民族」的な服を着用していたのである。

しかし、清朝の崩壊とともに、満族の風俗を排除する風潮が高まりを見せはじめる。^{チーパオ}「旗袍」が排除されることで、漢族女性の上衣下裳が主として着用されるようになる。この時期の上衣下裳は漢族固有の衣装として、旗袍を排除する役割を果たしていた。

しかし1920年代に入ると、そうした上衣下裳の「民族」的な意味合いも薄れていく。服飾は女性の装飾性を高める道具に位置づけられていくのである。しだいに服飾のファッション化が進みつつあった。

この「民族服」から「ファッション」へと服飾の意味が変化する中で、一般の人が着ない服を選択するという意味での「奇装異服」が登場した。たとえば「足や靴が見えないほどのロング旗袍^{チーパオ}」や、「肌を露出した下着のようなドレス」、「牛柄のような洋装」といった怪しい服装に関する記事が、装飾としての服飾の成立を物語っている（『申報』1934年7月6日「街頭印象記」）（図1）。もはや服飾は「民族」アイデンティティを表現するものではなくなっていたのである。

女学生たちも従来の上衣下裳に西洋的な服飾の要素を取り入れ、どこにもないような「奇装異服」を身につけるようになる。しかし、当時



図1 「街頭印象記」
1934年7月6日『申報』

の女学生の社会的な影響力を背景にして、これらの「奇装異服」は男性知識人を中心に厳しく批判される。女学生は新しい時代の象徴であり、西洋化する民国社会で重要な役割を果たすものとして期待されていたからである。それゆえに、女学生の服飾が華美になる傾向に対して、一般社会は危惧を抱くようになるのである。古くは、1911年10月10日の『申報』「清談」が、知識人女性としての女学生に対して、その服飾の傾向に違和感を表明している。「女子の学問や教養は外形からみることができる。知識がある人は、互いに贅沢な服飾を競争しなかった。しかし今日の服飾の奇異状況は女学生にまで影響し

3 上衣にスカートやズボンといったツーピースの服飾形態をいう。

た」という。1910年1月18日の『申報』「新聞画」では、近年の女学生の「奇装異服」(図2)を示しながら、それに代わるべき服飾は「上衣の丈は必ず膝下まであり、冬と春は藍色を使い、夏と秋は浅い藍色を使い、厚い化粧を禁止し、髪型はおでこを隠さず、洋装を真似するのを禁じる」ものであると主張している。いわば伝統への回帰が提案されるのである。このように服飾の統一を論じなければならないほど、女学生の服は乱れていると、当時の保守的な男性知識人の目には映っていたのである。

こうした女学生の「奇装異服」が示すのは、



図2 「新聞画」
1910年1月18日『申報』

「不中、不外、不東、不西、不男、不女、不妓女、不良家」のファッションであったという。すなわち中国でなく、外国でなく、東洋でなく、西洋でなく、男でなく、女でなく、妓女でなく、良家ではないファッションという意味である。1911年2月9日の『申報』「女校宜提倡改良服飾議・続」では、女学校の中で、髪型を男性教師に似せ、メガネをかけ、紙タバコを吸って、男性教師の真似をする女学生が現れていることが報告されている。伝統的な道德観では明確な男女の区別すら、曖昧なものになろうとしていた。従来の男女差や階級差、民族差を越える形で、女学生の「奇装異服」が広まりを見せていた。

たとえば女学生の装飾に対する次のような見方は、まさに「奇装異服」に対する批判を代表するものだった。1910年1月18日の『申報』「通俗談」にある女学生批判である。清末期の女学生の装飾には2つの種類がある。ひとつは華やかな妓女のようなファッションであり、もうひとつは淡白で教会の修道女のようなファッションである。今の女学生も2つの種類がある。ひとつは春と冬の間にみられる逃荒婦(災難がある時、家中の装飾を身に付けて逃げる)ファッションであり、もうひとつは夏と秋の間にみられる関亡婆(亡くなった人の家で霊を呼ぶ人)のようなファッションであるという。

1924年4月28日の『申報』「為女学生進一忠告」では、女学生の服飾は怪しくおかしいものが多く、互いに贅沢で艶やかなファッションを競い、デザインが激しく変化していることが報告されている。女学生は短すぎる、もしくは長すぎる服を身に着け、男女の区別がつかず、中国半分西洋半分の怪しい格好で市民の注目を集めているという。記事の筆者は、知識のない一般女性がこれらの「奇装異服」を着るのは仕方がないが、社会風習の改善に責任を持つべき知識人である女学生が、贅沢の風習に乗って、

見栄を張り、「奇装異服」を着ることを強く批判している。

女学生の「奇装異服」化傾向に対して、清政府は対策として制服問題を取り上げるようになる。1911年2月8日の『申報』「女校宜提倡改良服飾議」では、「服飾は一国のシンボルである。今、わが国でもっとも混乱しているのが服飾である。服飾の中でもっとも混乱しているのは女性服である」と指摘している。清末期から、西洋式の教育を受けた女学生の服は国民的関心のひとつになっていた。制服によって女学生の服飾をコントロールしようとする政策を政府はとろうとするが、西洋文化が流入し、女学生の社会的地位が上昇しつつあることを背景にして、その効力は疑問視されていた。

こうした制服問題から明らかになるのは、女学生を新しい社会を担うリーダーとして認知する社会世論を背景にして、華美になりがちなその服飾を制御することへの期待である。だが女学生の服飾はその後ファッション化し、むしろ一般女性のファッションリーダーとしての地位を獲得するようになる。

菊池敏夫は、新しい知識をもって社会を変革する女学生が、ファッションにおいても新しい女性を体現していたことを指摘している。短い上着とスカート、そして短い髪は、とくに「五四運動」以後の新しい文化を担う女性の象徴としてとらえられていたという（菊池 2002：40-41）。また高春明は辛亥革命後、もっともはやく旗袍を着用したのは漢族の女学生であったと指摘している。女学生がゆったりとした藍染めの旗袍を着て街を歩くと、一般女性の注目を浴び、羨ましがられ、しだいに真似されるようになったという（高 2002：102）。

女学生は摩登な都市のファッションリーダーとして、その服飾形態やライフスタイルが広く受け入れられていくことになる。そのときの女

学生は単にファッションのみではなく、行動様式そのものが従来の中国女性にはない道徳観に基づいていた。保守的な知識人層はそうした女学生の行動や服装を厳しく批判しながらも、他方で女性の「解放」に関心を傾ける女性や新しい道徳観を学んだ男性は、女学生を「摩登女性」として羨望の目で見るのである。やがて女学生は摩登女性の典型として、流行服としての旗袍を生み出す原動力となっていくことになる。

4. 新型旗袍の登場

清末・民国初期には、満洲王朝の旗人に由来する旗袍は、古い時代を象徴し、反満族の風潮から漢族はもちろんのこと、満族の女性も外出するときには着用をはばかるものとなっていた。しかし、女学生の「奇装異服」が広がりを見せる中で、上衣下裳が漢族の衣装としての性格を薄めるのと同様に、旗袍もまた満族の衣装としての性格を薄めていく。そのことは、旗袍がしだいにひとつのファッション形態として認知されることを意味している。すなわち、1920年代半ばになると、伝統的な旗袍の装飾や着方を改造した、「奇装異服」としての男装のような旗袍が現れ、後に西洋服的な要素を取り入れた「新型旗袍」という身体美を表わす服飾形態が登場するのである。

そうした旗袍の形は、「民族性」の強い伝統的な衣装からかけ離れ、より西洋化したドレス的な服飾形態となっていた。中国の服飾史研究では、1920年代後半から1940年代にかけて流行した旗袍を「新型旗袍」と呼んでいる。

まずその服飾形態の定義から検討する。新型旗袍の「新型」とは、伝統的な旧式旗袍と対置させた表現である。全体的に、旧式の旗袍はゆったりとし、直線的なシルエットを特徴としていた。それに対して、新型旗袍（民国中・後期）は細く、曲線的なシルエットを特徴としている。

また旧式の伝統的な旗袍を装飾していたおびた
だしい縁取りや身分を表す模様などもなくなっ
た。

伝統的な旗袍が、女性や夫の社会的身分を表
現する道具として機能していたのに対して、新
型旗袍は女性が社交の場に進出するために女性
美を表現する道具として機能し、他方で職業女
性や主婦が社会活動に参加するための、より合
理的な形態の服飾へと変化した。

ここで新型旗袍の成立について検討してみる。

先述したように、1920年代には服飾の「民
族性」が薄れる中で、上衣下裳と共存する形で
旗袍も着用されるようになった。高官夫人のよ
うな女性のリーダーや、女学生が知識人として
の立場から、新女性や男性のイメージに重ねて
旗袍を着用する傾向が現れていた(図3)。

1926年以後には一部の女学校で旗袍が制服
となり、1929年4月には民国女性の礼服にも
定められた(袁 2000: 51)。

新型旗袍の成立について、『上海市大観』では、
女性が着ている旧式の上衣下裳は、1925年に
変化が生じたという。最初は旗袍式のベストが
現れ、短襖は変わらないが、旗袍式のロングベ
ストがスカートの代わりに着用された(図4)。
そして、1926年に短襖とロングベストが一体

化した結果として、現在に見るような旗袍が成
立し、流行したのだという。しかし屠の報告に
よれば、当時の女性がこの男性的な装束を着る
ことに対して年寄りが反対したために、保守的
な女性には敬遠されていたと記されている(屠
1948 下編: 20)。

伝統的な旗袍は女性の身体美を表現せず、長
袍の形に近いために、女性が着用するにしても
男性の服飾としてのイメージが与えられていた
(図5)。そのことから女性が着用する初期の新
型旗袍には、「奇装異服」のイメージが与えら
れることになる。女性が男性の格好をするとい



Mrs. Sun Yat-sen accompanied by Mrs. Sun Fo
in entering the Pi-yun Temple

總理夫人宋慶齡女士與孫科夫人陳淑英女士
入碧雲寺致祭
(魏守忠攝)

図3 「奉安大典」

1929年7月第37期『良友』: 3



図4 「惠羅公司」広告

1926年3月28日『申報』



図5 「自由布」広告
1926年1月12日『申報』

うのが、初期の新型旗袍の着用に対する評価だったのである。新型旗袍をもっとも早く着用した人は漢族の女学生であるというのが中国服飾史の定説になっている。

元来、旗袍は長袍の一種として、男性知識人を象徴していた。その旗袍を女性が着用することに対して、保守的な男女観の立場からは批判が与えられていた。晏始の『両截衣』では、「最近、男性の長袍に似た、いわゆる旗袍という女衣が

流行っている。この男性っぽい旗袍は、従来の〈両截衣〉（著者注：上衣下裳）を破ったが、一般の衛道士[保守的な人]の禁忌を犯したため、禁止されようとしている。禁止の理由は旗袍が〈服妖〉である」からだという。ここで晏始は旗袍が「服妖」であることの意味を解いている。彼が子どもの時に読んだ『三国演义』[三国志演義]には、漢朝が滅びるとき、前兆として「雌鶏が雄鶏に化けた」ことが紹介されている。そこで当時、女性が長衣を着て、男性と同様になることが「雌が雄に化けた」ことと重ねあわされたのである（『新女性』1927年第1巻第4号「両截衣」）。伝統的な知識人にとって、旗袍は男性の長袍のイメージが与えられるもので、女性の間で流行することには危機感が感じられたのである。

こうした旗袍に与えられた女性知識人や新女性としての性格は1926年以後、女学生の制服に対して出された民国政府の条例に反映している（袁 2000：54）。そこでは藍染めの木綿の旗袍が、女学生の制服に採用されていた。1927年7月17期の『良友』で、中西女中の卒業式に登場する女学生は、すべて旗袍姿をしていた（図6）。袁杰英の『中国旗袍』でも、「素朴で摩登である」女学生の旗袍が評価されて



図6 「新都時事」
1927年7月第17期『良友』：7

いる（袁 2000：54）。旗袍は、男性知識人としてのイメージを引き継ぐ形で、女学生のシンボリックな服装へと変化する可能性を準備していた。女学生の「奇装異服」を経て、1920年代の後半から、上衣下裳や伝統的な旗袍の「民族服」としての性格が薄れる中で、旗袍が社会的に受け入れられる地盤が整備されようとしていた。そうした旗袍がしだいに一般女性へと拡大していくことになる。流行服としての新型旗袍が成立するのである。

この新型旗袍の流行に関しては、屠詩聘の『上海市大観』では、「最初は上海から出発し、内陸へと広がっていた」と記録されている（屠 1948 下編：19）。山内智恵子の『20 世紀漢族服飾文化研究』でも、「20 年代から、まず上海、北平（北京）、天津などの大都市で流行し、次に中等都市へ、小さな町へと伝わっていく。30 年代になると、旗袍は小さな町まで普及し、裕福な農村地域の上層社会の家庭に影響が及ん

でいた」と考察されている（山内 2001：87）。これらの研究を参照する限り、新型旗袍の成立は 1920 年代から始まり、上海からその他の地方へ広まっていったというのが一般的な見解となっている。

また新型旗袍の社会集団間の流行については、高春明が「女学生→大衆」という流れを示し（高 2002:102）、袁杰英は「女学生→女優→大衆」という流れを指摘している（袁 2000：53）。他方で張浩と鄭嶸は「この女学生の説がどれほど正確なものか特定できない」として、これらの女学生源流説には疑問を示している（張・鄭 2000：11）。これらの旗袍流行の詳細については今後の研究課題として、さらに資料を読み解き、集団間や社会階層における差異を明らか



図7 「惠羅公司時裝展示大會」
1929 年 3 月 17 日『申報』



図8 「惠羅公司」広告
1932 年 4 月 3 日『申報』

にしていく必要がある。

本稿では、新型旗袍は女学生から出発して、メディアやファッションショーを媒介として、一般の女性に広まっていったと位置づけておく。たとえば、1929年3月17日の『申報』「惠羅公司时装展示大会」には、ショートやロング、洋装風に改良した新型旗袍が登場している（図7）。1932年4月3日の『申報』にある、ヨーロッパやアメリカの最新の春夏衣料を紹介した惠羅会社の広告からは、3人の摩登女性がすべて足首までのロング旗袍を着ていたことを知ることができる（図8）。さらに、1933年6月3日の『申報』「婦女三部曲」では、少女から若奥様までの3人の女性がすべて旗袍姿である。このことは、あらゆる年齢の女性に旗袍が受け入れられていったことを象徴的に物語っている（図9）。1920年代後半から1940年代にかけて、女学生が着用することからはじまった新型旗袍は、中国全土の都市や町で流行し、定着することになるのである。

5. まとめ

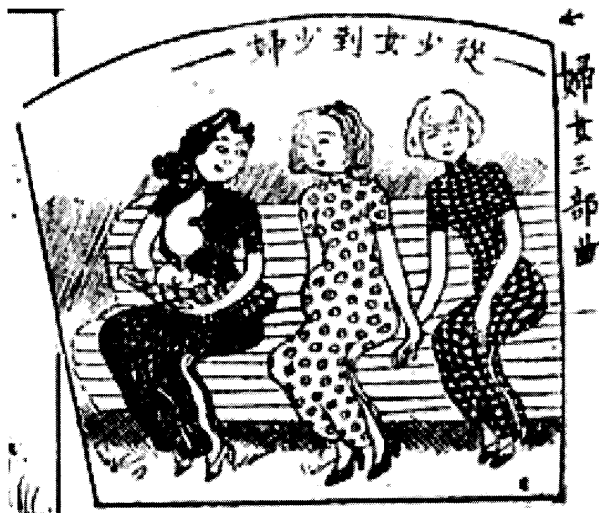


図9 「婦女三部曲」
1933年6月3日『申報』

「近代」上海の新しい女性集団である「女学生」は、西洋化した摩登なライフスタイルの下で、満洲王朝の旗人に由来する伝統的な旗袍を、「近代」都市のファッションである新型旗袍へと変化させた。そして同時に女学生は、自ら知的かつファッション的なリーダーとしての役割を果たし、旗袍を一般の女性へと広げていった。こうした流行現象の背景には、上海という都市に、租界という「国の中の国」⁴が存在したことがあげられる。上海に租界が設置されたことは、限られた都市空間の中だけであるにせよ、伝統と対抗できる西洋文化の受け入れを可能にし、それを中国的なライフスタイルに接続させる基盤を用意したからである。そうした環境の中で、女学生が旗袍を着用することで「奇装異服」が生まれ、新型旗袍が流行する原動力となっていた。

清末・民国初期の中国では、歴史的な変化期にあつて、中国と西洋、伝統的な道德観と西洋的な価値観が混在していた。従来の「民族性」の強い服飾は、租界という空間の中で、満族や漢族といった「民族性」が薄れ、装飾性の強い「奇装異服」に移行した。新型旗袍もこの「奇装異服」の一種として出発している。初期段階の新型旗袍は男性知識人や新女性といったイメージが重なり、メディアに取り上げられ、批判されることも多かった。しかし他方で、これらの「奇装異服」は社会的に尊敬を受ける知識人としての女学生に着用されることで、一般女性に真似される対象にもなった。ここに新型旗袍が流行する基本的な構造がある。

しかし、新型旗袍は従来の伝統的な服飾形態から離れ、「奇装異服」として現れたが、完全な西洋服に移行することはなかった。また、そ

4 高橋と古厩は近代上海を取り上げるときに、「租界をセンターとするコマーシャル・エンボリアム(商業都市)として出発し、〈中国の中の西洋〉の景観をもちつつ、成長しはじめる。近代都市・上海は、最後の王朝となる清朝統治のなかに形成され、その支配を拒否する植民地的空間・〈国の中の国〉として形成された」と指摘している(高橋・古厩 1995:2-3)。

れを別な側面から指摘すれば、新型旗袍は伝統的な旗袍の服飾形態を継承したが、伝統的な旗袍に戻ることもなかったといえる。ここに新型旗袍にみる中国文化と西洋文化の接続と融合の構造がある。

最後に、その理由を2つ指摘して、本論の結びとしたい。

第一に、旗袍の洋装化現象や「奇装異服」としての登場は、旗袍が「民族」的な服ではなく、摩登^{モダン}の象徴として定着したことを物語っている。「近代」上海に設置された租界は「国の中の国」であり、「中国の中の西洋」であった。その新しい都市空間で生まれたのが、女学生の「奇装異服」だった。新型旗袍は確かに源流を旗人の衣装に持つが、それが「奇装異服」の一端として登場した限りにおいて、すでに「民族」的な服としての性格を失っていた。むしろそれは西洋化したファッションであり、「女学生」という伝統的な女性とは異なる女性のシンボリックな服飾形態として、一般の女性に受け入れられていったのである。新型旗袍は「女学生」の服装として、「文明」や摩登^{モダン}のイメージが重ねられていく。そして女学生が尊敬されるにつれて、そのファッションも真似する対象になっていったのである。

第二に、新型旗袍が成立した場所が「国の中の国」としての租界であったということは、新型旗袍が西洋服に取って代わらなかった理由ともなる。なぜなら租界の外側には、中国伝統の生活様式に基づく「中国人」の空間が広がっていたからである。女学生の新奇な行動が男性知識人の批判を引き寄せるのも、その批判を支持する空間が租界の外に広がっていたからである。すなわち、租界では許されるような行動や衣装も、租界の外に広がる「華界」（租界以外の中国人が住む地域）の伝統では批判の対象であり続けた。服飾もまた、中国伝統の道徳に反する

ものを批判する見えないルールによって制約を受けていた。結果として租界内部では西洋への関心が高まりを見せていたとしても、完全な西洋服や西洋的なライフスタイルに移行することは困難であり、中国的な基盤のもとで西洋的な要素を取り入れるのが租界における華人のライフスタイルだったのである。新型旗袍が西洋化しつつも「中国服」として存在したことの意味は、「国の中の国」としてある租界の文化的バランスを反映していたといえよう。

このようにして成立した新型旗袍はその後、中華人民共和国の建国と文化大革命、そして改革開放などの時代の変遷に伴って、その社会的な意味が大きく変動することになる。紙幅の関係上、本論ではその成立と新しい女性像である女学生との関係を整理することしかできなかった。その後の過程に関する詳しい分析と考察については次稿以降に譲ることにする。

参考文献

- 1) 袁杰英 2000 『中国旗袍』 中国紡績出版社
- 2) 菊池敏夫 2002 『上海職さまざま』 勉誠出版
- 3) 『上海通史』編委会 1999 『上海通史 1-15』 上海人民出版社
- 4) 高橋孝助・古厩忠夫 1995 『上海史 - 巨大都市の形成と人々の営み』 東方書店
- 5) 素素 1996 『前世今生』 上海遠東出版社
- 6) 高春明 2002 『中国服飾』 上海外語教育出版社
- 7) 張浩 鄭嶸 2000 『旗袍 - 伝統工芸与現代設計』 中国紡織出版社
- 8) 屠詩聘 1948 『上海市大観 - 上・中・下篇』 中国図書編訳館
- 9) 山内智恵美 2001 『20世紀漢族服飾文化研究』 西北大学出版社
- 10) 『新女性』 1927年第1巻第4号 「両截衣」 晏始:240
- 11) 『申報』 (1872-1949)
- 12) 『良友』 (1926-1945)

受理年月日 平成 15 年 10 月 14 日

審査終了日 平成 15 年 12 月 11 日